

## 相国寺七重塔の空間を読む

—巨塔を建てた足利義満の意図をめぐって—

京都大学大学院准教授 富島 義幸

応永6年(1399)、室町将軍足利義満が京の相国寺に建立した七重塔（【図①】）は、景徐周麟(1440～1510)が著した「翰林胡蘆集」という記録に高さ360尺（約109m）と記される。今では失われ、その跡すらわからなくなってしまっているが、今日知られている前近代の日本の塔のなかでもっとも高い。周知のように、現存する日本の木造の塔で一番高いのは東寺五重塔だが、基壇をふくめた総高は約56m。相国寺七重塔は東寺五重塔の2倍もの高さだったことになる（【図②】を参照）。こうした失われた歴史上の建築の復元は、建築学として大変興味深いものである。

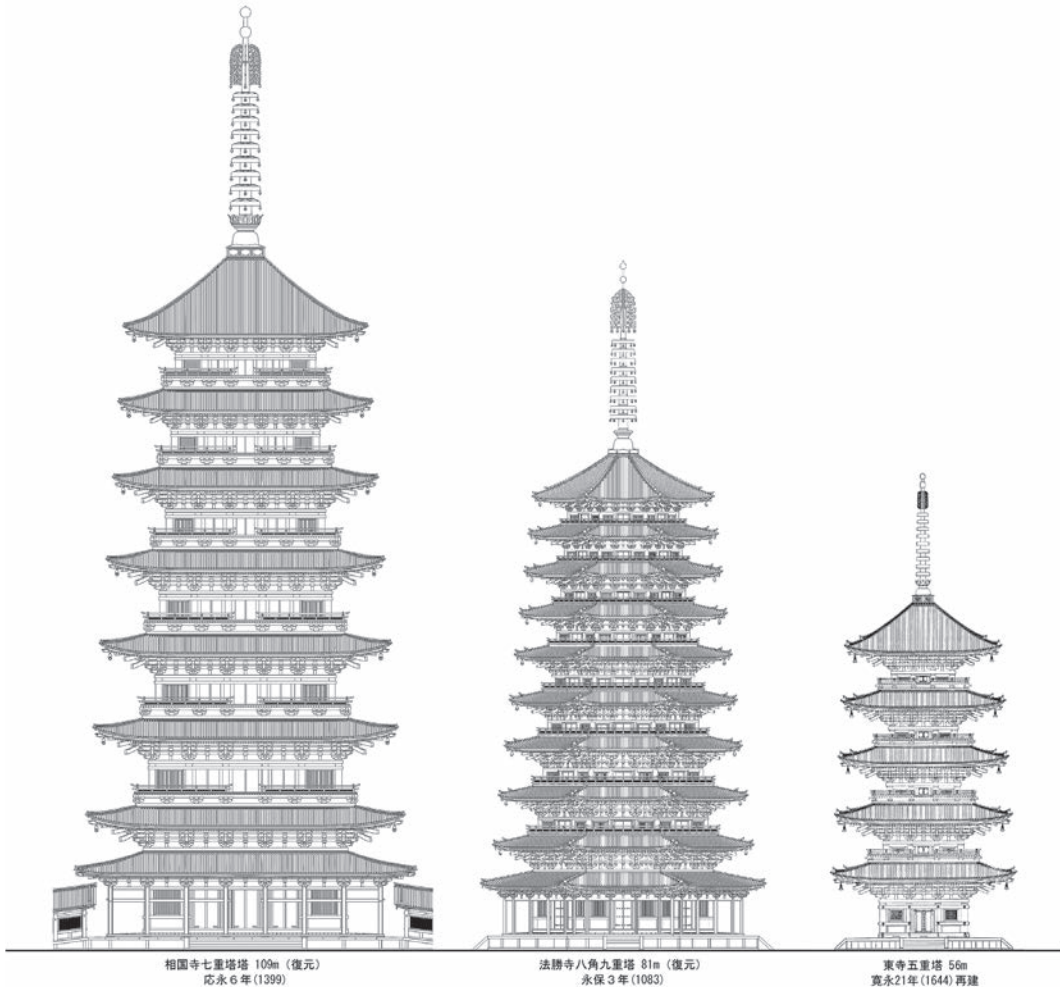
それにしても、これほどの巨塔を建てた義満の意図は、どのようなものだったのか。義満は時の最高権力者の一人である。巨大な建造物を建設することで、自らの権力を誇示したといわれてきた。たしかにそうなのであるが、この巨塔には京都という歴史と伝統の重層する都市において、新興勢力である室町幕府の権威の正統性を示すための、より深い意味が込められていたはずである。それを具体的に明らかにすることは、歴史学としてはもとより、建築を建てる意味を考えるうえでも興味深い課題といえるであろう。建築学の空間を読み解くという独自の視点からは、ほかの分野からは読みとれない世界がみえてくることがある。以下では、こうした視点をもって、この巨塔を建てた足利義満の意図を読み解いてみたい。

\*

相国寺七重塔以前にも、京都に聳え立っていた巨塔がある。白河天皇が平安時代に建立した法勝寺八角九重塔である



【図①】相国寺七重塔復元 CG  
(復元考証：富島義幸、CG制作：竹川浩平)



【図②】相国寺七重塔と法勝寺八角九重塔・東寺五重塔  
 (東寺五重塔立面図は『日本建築史基礎資料集成11』〈中央公論美術出版、1984〉より転載)

（【図②】を参照）。その高さは27丈（約81m）といわれ、八角にして九重という特異な形式からも、日本建築史上きわだつ建築である。この九重塔は、鎌倉時代に再建されてはいるものの、南北朝時代に火災で失われるまでのおよそ260年間、王家の権威の象徴として京都に君臨した。京都で政権をかまえ、天皇や院と向き合うことになった武家の義満は、王家の権威の象徴であるこの巨塔をこえようとしたのである。

高さはもとより、相国寺七重塔で興味深いのは安置された仏と、供養会すなわち落慶供養のときの空間のあり方である。これまでこの七重塔は、義満が禅宗寺院に建立した塔なので、武家ための禅宗の塔と当然のように考えられてきた。

まず安置仏について。これまで研究者のあいだでも問題にされなかったが、禅宗の寺院

に建立されたにもかかわらず、相国寺七重塔に安置されたのは、密教の根本的な世界観をあらわす両界曼荼羅の仏だった。禅宗寺院になぜ密教世界を象徴する塔を建てるのか、という疑問がわいてくる。

次に、供養会は千人の僧侶による盛大なものであったが、参列したのは関白一条経嗣をはじめとする貴族たちと、仁和寺御室永助、天台座主尊道をはじめ、京都の東寺や延暦寺・園城寺、奈良の東大寺や興福寺など、古くからの顕密仏教の寺院の僧侶だった。武家の將軍足利義満が、禅宗の寺院である相国寺に建立した塔である。ほんらいならば、武家の人びとと禅宗の僧侶が参列するべきではないのか。

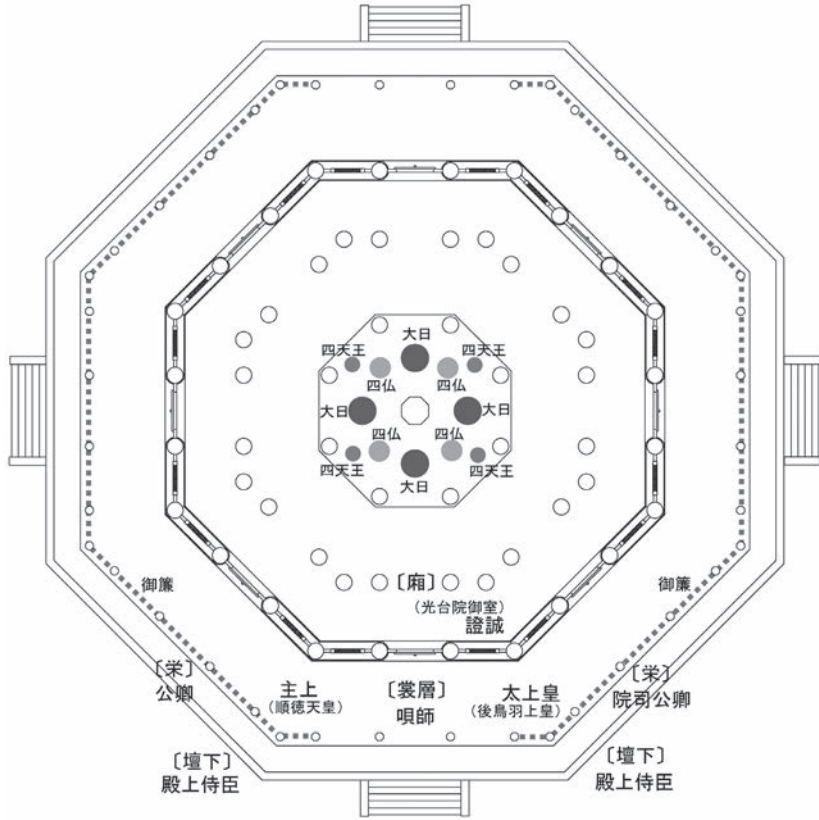
こうした疑問は、この七重塔の供養会の空間を、法勝寺八角九重塔の供養会の空間と比較すると、たちまち氷解する。じつは相国寺七重塔の供養会は、顕密仏教の僧侶と貴族からなる点、さらには塔の内外での彼らの着座の位置からしても、法勝寺八角九重塔など、それまでの天皇・院の御願寺の堂塔と同じなのである。

\*

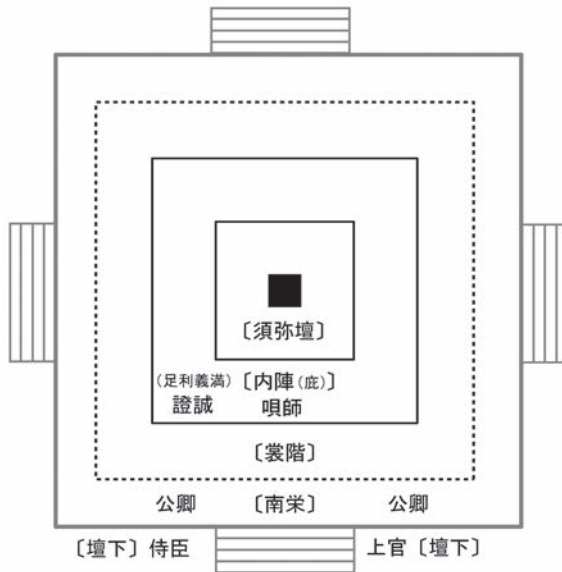
御願寺の供養会には、天皇・院を頂点とした朝廷のヒエラルキーと、皇室出身の僧侶を頂点とした顕密仏教のヒエラルキーが重層している。平安時代以降、仁和寺や延暦寺など有力な顕密仏教の寺院には、皇室から僧侶として入寺して仁和寺御室や天台座主となり、天皇や院の分身として、当時大きな力をもっていた顕密仏教を統括した。とくに院政期以降の御願寺の堂塔の供養会では、仁和寺御室が参列者のなかでもっとも上位に位置する證誠という役割をにない、願主である天皇や院よりも仏つまり本尊に近い、一番奥に着座するのが通例であった。こうした空間構成は、塔でいうならば建保元年(1213)の法勝寺八角九重塔再建供養会にその典型をみることができる（【図③】）。すなわち、御願寺供養会の空間は、

[母屋=仏] [庇=證誠] [裳層=天皇・院(願主)] [栄=公卿] [基壇下=上官、侍臣]と、塔内外の空間の分節にしたがい、仏教・朝廷からなるヒエラルキーにもとづいて構成されていた。仏教空間であるがゆえに、仏教が上位に位置づけられているのである。義満は相国寺七重塔の供養会で、こうしたヒエラルキーを——天皇・院をのぞくのではあるが——そのまま再現した。

相国寺七重塔の供養会の空間構成（【図④】）をみると、貴族たちの座は、御願寺の供養会と同じく、塔の中ではなく、「栄」つまり建物の外の軒下や、基壇の下にある。メンバー、着座の構成いづれからみても、あきらかに御願寺供養会になぞらえられている。そして義



【図③】建保元年(1213)法勝寺八角九重塔再建供養会の空間構成概念図



【図④】応永6年(1399)相国寺七重塔供養会の空間構成概念図

満自身は法皇のようにふるまい、貴族はもとより、仁和寺や延暦寺の法親王をさしおいて、證誠という一番高い立場で参列したのである。願主の御座となる裳層をそなえながらも、義満がそこではなく、證誠として内陣（庇）に着座したことに義満の意図が明瞭にあらわれているといえよう。

すなわち、相国寺七重塔の供養会の空間構成からは、義満が貴族と顕密仏教からなる旧体制なかで頂点に立つことを示す、政治的なパフォーマンスであったことが読みとれる。相国寺七重塔は、すでに自らが統括する武家社会や禅宗にむけたものではなく、これからまさに配下におさめようとする旧体制——京都において伝統と格式をもつ朝廷と顕密仏教にむけたものだったのである。

こうした義満の意図がわかれば、第一の疑問——相国寺は禅宗であるにもかかわらず、なぜ密教の塔を建てたのか——も理解できる。法勝寺八角九重塔の安置仏は、同じく密教の曼荼羅の仏で、金堂とともに両界曼荼羅を構成していたのである。ここでくわしく述べることはできないが、中世において両界曼荼羅は、宗教的のみならず社会的な正統性をもあらず、王家と有力寺社共有の理念として、重要な意味をもっていたと考えられる。義満は、中世の王家とおなじく、京都の都市空間のなかで、巨大な塔をもって両界曼荼羅をかかげ、自らの政権の正統性を示そうとしたわけである。

御願寺である法勝寺にここまでなぞらえた相国寺七重塔は、相国寺の名をかりた「室町の王権の御願寺」ということができよう。旧体制と対立してそれを打ち壊すのではなく、それをできるかぎりそのまま利用し、自らを頂点に挿げ替えていく——相国寺七重塔の空間からは、したたかともいべき義満の政策がみえてくる。

\*

建築から建築を読み解くというのが、これまでの建築史学の方法・目的の主流であり、もちろん今後も重要な意味をもつであろう。しかし、建築が建てられた時代の社会や思想世界に踏み出していくことで、建築やその空間の意味がよりゆたかにみえてくるも多い。こうした広い視野からの評価づけは、個々の建築がもつ意味や価値をより広く、説得力をもって社会に伝えていくことにもなるであろう。

また、建築空間からみえてくる世界は、建築学として意味をもつのみならず、関連する諸学への学際的な研究成果としても意味をもつはずである。建築やその空間を読み解くことで、他の学問分野ではみえない世界がみえてくるのである。歴史的な現象を建築学の視点からどのように評価するのか、関連諸学からの期待を感じることも多々ある。建築史学

はこれから魅力ある学際的研究を展開する可能性があり、こうした研究は日本のアイデンティティにもふれる学問として、重要な役割をになうことになると期待している。

[付記] 本稿は、富島義幸「塔・曼荼羅・王権—法勝寺八角九重塔と相国寺七重塔の意義をめぐって—」（長岡龍作編『仏教美術論集5 機能論』竹林舎、2014）の内容をもとにしている